

第40回現地研究会に参加して

季 里 特

(北大農学部)

私が中国から留学してきて、三年あまりも経ちました。専攻は農畜産加工機械ですが、日本の農畜産業の生産方式も広く知りたいと考えています。北海道家畜管理研究会のおかげで、ほぼ、毎年この現地見学にも参加させていただきました。日本の農業を見ながらよく中国の農業と比較して考えております。中国の農業の歴史は世界では最も古いと言えるでしょう。特に、私の出身地西安のあたりは伝説によると、4,000年前に「神農」氏が人々に農業を教えたところですが、残念ながら、今日の農業は世界（日本も含む）の先進国に比べ、たいへん立ち遅れていると感じています。日本人もご存知のように、約40年前までの中国の農業は何千年も続いた昔ながらの自給自足の自然経済でした。その当時、中国の食糧の状況は、いまのアフリカよりも深刻でした。その後、このほぼ40年間に、中国の農村はいろいろ改革を行いました。いわゆる土地改革と集団化経営が進んできました。最初の頃は、小規模の集団経営をやりましたが、結果は良好でした。中国の農業は完全に自給自足できるようになりました。しかし、その後、集団化の道に過激に進みすぎ「人民公社」、「農業はすべて大塞に学ぶ」、「農業のすべては食糧の生産」などの政策が次々に遂行されてしまいました。結局は、農民の生産意欲はなくなり、農業経営は乱れ、過剰の開拓による砂漠化が、深刻化し、山も禿げ山になり、いわゆる、全国の農業は、ほぼ、破産の状態になってしまいました。十年前、即ち「文革」の後には、それまでの政策を反省して、結局、個人経営の方式がいきなりひろがり、人民公社は実質的には解体されました。農業も迅速的に復元し、発展してきました。しかし、

生産量が増加したといっても、農業経営に関係するいろんな面、例えば、農業機械化、流通、貯蔵加工等は、追いつかなくなりました。農民の収入がまだ低い状態では農業施設、農業機械などの発展はなかなか難しいです。今回のような見学会のたびに、日本の農業経営を中国に導入しようと思いましたが、国の状況は違うわけで、そのままの形では、不可能でしょう。しかし、日本の農家のやり方は、やはり、各部分各部分では、中国の農業の参考になると思っています。特に、今回の見学会では、中札内農協を見学して、いろいろ関心を持ちました。中札内村は十勝平野の南にあり、内陸性の気候で、他のところと比べあまりめぐまれている地域だと思えます。人口は4,042人、農家戸数271戸（60年7月）で、総面積は29,207haで、私の故里と似て、ほとんど畑作で、畜産物も生産しています。しかし、60年の生産実績によると81.8億の総生産額も出ています。反当り農業粗生産額の平均値は十勝の平均値をはるかに上まわっています。経産牛1頭当り出荷乳量は8,869kgにも達しています。最も感心させられたのは、やはり、このユニークな経営方法です。この経営の特徴は農業の法人化です。よく聞いたら、中国の集団経営とよく似ています。農民たちは、力を合せて、長期計画を建て、いろんな立派な事業を行いました。例えば、旧部落組織を生産小組合に改善、農協資金による奨学金制度の確立、北海道畑作経営技術研究所、中札内村畜産研究所の設立、農業の法人化、共同経営化、作物別事業部会による農協運営、婦人を主体に「生活協同組合」の発足等が遂行され、大成功を収めています。これらのやり方は、中国の現状には大きな参考価値

があると思います。例えば、今の中国農民の収入では、農業機械の購入は非常に無理です。個人経営による生産意欲は高まっていますが、やはり、農業機械が発展しなければ、近代の農業にはなれません。しかし、中札内村のように、各農家が全部の機械を持たないで、グループごとに持ち（機械利用組合、大型機械センター）機械の利用機会を拡大し、効率的に利用することによって、専門分化して、生産能率を高める一方、全村的な協力体制によって、農畜産物の生産コストを大幅に節減し、同時に省力化になるという方式をとれば、

中国の現状には最もふさわしいと思います。中国農村には教育の問題、農業科学研究技術の普及、婦人の社会地位と役割等の問題が多くあり、十勝の農村と似ているところも多い。だから、その意味で今回の見学会は大収穫であったと言えます。十勝の壮大な野原、牧場にある美しい花壇、自信満々の農民たちの笑顔、立派な農業施設等は私に対して、単なるよい思い出だけとすることなく、ここの農業の発展の歴史と営農方法をよく勉強して、中国の農業にも活用したいと思います。